

「今が新」

使徒の働き 2 : 1 - 4

May.23.2021

使徒の働き 2 : 1 - 4 (パウロ)

Preface

今日は、ペンテコステ礼拝の日です。

ペンテコステとは、ギリシア語で50日目という意味で、今お読みした聖書箇所にもありますように五旬節とも言い、イエス様が復活されてから50日目、またイエス様が天に昇られてから10日目の日です。

旧約聖書では、ペンテコステや五旬節を7週の祭りとも言います。

このペンテコステの日、つまり、日曜日の朝に120人以上の信徒たちが集まって、礼拝を献げ祈っていたところ、激しい風が吹いてきたような響きが起こり、炎のような舌が現れて、そこにいる人々に聖霊なる神様が下り、聖霊に満たされた信徒たちは、他国の言葉で福音を語り始めました。

これが、ペンテコステの日に起こった聖霊降臨です。

初代教会の信徒たちは、イスラエルの民たちが割れた紅海を渡ったような、歴史上唯一の神体験をしました。

Part One

ペンテコステと言いますと、初代教会のクリスチャンたちが何かこう特別な神秘体験をした日で、現代に生きる私たちも、彼らに倣った神秘体験を追体験できる動機付けをするような日と取られることがあります。

ペンテコステは、何かこう不思議な霊的神秘体験をクリスチャンたちに促す日ではありません。

それよりも、イエス・キリストの誕生という歴史的イベントを祝うクリスマスのように、この地上におけるキリスト者たちの群れ、教会の誕生という歴史的イベントを祝う日であります。

「今日はクリスマス礼拝です」と言えば、私たち誰でも、「ああ、イエス様の誕生を祝う礼拝だ」と直ぐに分かりますが、

「今日はペンテコステ礼拝です」と言っても、「ああ、今日は教会の誕生を祝う日だ」と思う人は、そんなにいないかもしれません。

むしろ、聖霊という何か神秘的な方が降臨され、その聖霊によって人々が満たされた日というように、人々が何か不思議で特別な神秘体験をした日だと覚えられる傾向があります。

が、ペンテコステの要点は神秘体験ではなく、神のなさるわざの新しい幕開けと、その開けた幕が今も着々と進行していることを改めて覚える日です。

なので、2000年前のペンテコステの聖霊降臨という唯一無二の歴史上たった一度の特別な出来事の再現を現代において願うことは、イエス・キリストの誕生を現代において今一度願うかのような、ナンセンスな話になってしまいます。

かと言ってももちろん、聖霊の満たしとか、聖霊の不思議なお働きなんかはないという意味ではありません。

聖霊様は、今も私たちに、初代教会のクリスチャンたちが経験したような神秘的な霊的体験を現代においても与えてくださいますし、お与えになるでしょう。

祈っていたら聖霊の働きによって、手のようなものが口に入って来て、舌を動かし異言を語り始めたとか、牧師に祈ってもらったら、後ろの方に倒れて意識のあるまま神の臨在を体いっぱい体験したとか、祈ったらその場で癒されたとか、今でも、聖霊による神秘的な霊的体験があることは事実です。

しかし、そのどんな霊的体験も、ペンテコステの再現ではなく、ペンテコステの再現を願う動機付けでもありません。

それは、単純に、神様がお与えになった恵みです。

ペンテコステ礼拝は、霊的体験を促す日でもありませんし、また、キリスト教信仰において無理に霊的体験を促す必要もありません。

霊的体験がキリスト教信仰の必須条件ではありませんし、霊的体験をしたしないが信仰の有無や、信仰の敬虔さに比例するというものではなく、長い信仰生活における一つの恵みでしかありません。

その恵みを誇り、その恵みをもって他のクリスチャンを見下げたり、優劣をつけようとするならば、その貴い神の恵みはもうそれ以上神の恵みではなく、見られない傲慢に成り下がってしまいます。

私たち信仰者にとって、これに勝るものはないという共通の霊的体験は、第一コリント12章にあるように、「聖霊によって、イエスは主です。イエスこそ、私の唯一の救い主であります」と告白し信じられることです。

突き詰めていきますと、これに勝る霊的体験はありません。

私自身、不思議な体験をさせていただいたことがあります、その体験を誇り、他のクリスチャンを見下げようとしている自分を発見した時、本末転倒な自分の愚鈍さを反省するしかありませんでした。

そうして、改めて聖書の登場人物たちを見てみますと、すべての信仰者たちに必ず霊的神秘体験が伴っているわけでもなく、

霊的神秘体験をした人物たちでさえ、長い信仰人生におけるほんの一瞬の出来事で、その大半は、神の御言葉を日々食し、祈りを献げ、自分の思いを神に聞いていただくことを通して、結局神の思いとずれていることに気付かされ、神の御旨に説得され、降伏し、納得していく姿が見えてきました。

つまり、霊的神秘体験は、信仰が強いからとか、信仰が良いから与えられるものではなく、むしろ、信仰が弱く頑なだからこそ与えられる恵みで、それを誇ったならば、それこそ本末転倒も甚だしいということに気付かされました。

よって、先ほど読みました使徒の働き 2 章に書かれているペンテコステ、五旬節に起こった聖霊降臨を、「私もこれに似たような体験をしたことがあるから、信仰者として一人前なの。あなたも一人前の信仰者になるために、こういう体験が出来るように頑張りなさい」と上から目線で、他の人たちに接していくならば、全くもって、ペンテコステを祝うペンテコステ礼拝の本来の意図から大きくずれている事になりかねません。

Part Two

では、ペンテコステとはどんな日なのか？

それは、先程も言いましたように、ペンテコステは、キリストを信じる群れである教会が聖霊によって誕生した日であり、また、その教会の誕生と共に同時に始まったのが、多言語で福音が語られるという福音宣教の業です。

その業が、今の私たちにまで広がって届けられて、私たちは今こうしてここにいますし、

これからも、その業が広がって届けられ、キリストを信じる者たちが、新たに起こされていきます。

この神の宣教の業の始発点が、ペンテコステの聖霊降臨です。

また、このペンテコステに起こったことは、あたかも、おとめマリアが聖霊によって身ごもり、時が満ちてお生まれなされた教会のかしらである主イエス様の誕生を連想させますし、さらには、そのイエス様のことを御使いが「この方こそ、人々をその罪からお救いになる約束のメシアです」と最初の福音を宣べ伝えた姿とも重なります。

つまり、ペンテコステは、救い主イエス・キリストが旧約聖書の約束に従って、

時が満ち2000年前のユダヤのベツレヘムにお生まれになった歴史的な事件を祝うクリスマスのように、

旧約聖書と主イエス様の約束の御言葉に従って、聖霊が、キリストを信じる者たちに下り、世の中に向けて教会の誕生を公に宣言したことを祝う日です。

そして、新約聖書の中で最も大事な内容の一つが、いつの時も聖霊によって新しい時代の幕開けが起こっているということです。

聖霊は、苦難と苦悩と暗闇と暗黒が覆っている地上に、闇を打ち破る光として来られたキリストの誕生とその公生涯をお導きになり、

また、キリストの十字架と復活と昇天をもって完成した救いの業を告げ知らせるために五旬節の日に弟子たちに望み、

光の子たちの群れである教会を誕生させ、

さらに、キリストの再臨と神の国到来を待ち望む新しい時代の幕開けと、それに向かって物事が前進しているという事実を証していただきます。

真理に通じる新しい誕生には、いつも聖霊なる神様が関わっておられます。

聖霊なる神様は、ある意味「新し物好き」です。

だからと言って、時代とともに過ぎ去っていく「新しい物」ではなく、永遠に残り、永遠に記念され、永遠に祝われる「新しい物」を生み出すお方です。

ヨハネの福音書3章で、イエス様が、「まことに、まことに、あなた方に言います。人は新しく生まれなければ、神の国を見ることは出来ません。人は、聖霊によって生まれ変わらなければ、神の国に入ることも出来ません」と、人の新たな霊的誕生についても、聖霊なる神様が第一に関わられることを言及します。

また、詩篇51篇を見ますと、姦淫の罪を犯したダビデが神様に、「聖なる御霊をもって、私の霊をきよく新しくしてください」と、罪を悔いて涙ながらに祈る場面がありますが、私たち罪人の霊的刷新も聖霊様によって唯一なされるものであり、私たちの言葉にならない霊的うめきにも深く係わって下さる方です。

キリストの誕生、教会の誕生、罪人から神の人への新しい誕生、人の霊の刷新と、人間の本质部分において、必ず関わりを持たれるお方が、聖霊なる神様です。

Part Three

聖霊が、ペンテコステの日に弟子たちに降臨されたというのは、たまたまその日だったというわけではありません。

そこには、れっきとした理由があり、神様の御旨があります。

そして、その理由こそ「新たに」、または、「新しく」ということです。

最初にお話ししましたが、ペンテコステや五旬節は、旧約聖書では7週の祭りの日と言って、過ぎ越しの祭りの日の翌日の日曜日から数えて50日目の日曜日に、新しい穀物の献げものを主に献げる祭りのことです。

レビ記23：15－16（パワポ）

（この“安息日の翌日から”というのは、過ぎ越しの祭りが行われた次の日、“日曜日から”ということです。）

7週の祭りも、「新しくされた」ことを祝う日なんです。

そして、この7週の祭りと深く結びついているのが、過ぎ越しの祭りなのですが、過ぎ越しとは、イスラエルの民たちがエジプトの奴隷にあった時、神様が彼らを救い出すために成してくださった贖いの業です。

奴隷の身分であるイスラエルの民たちを解放するよう再三再四に渡って、エジプトの王ファラオに申し立てましたが、申し立てれば申し立てるほど、その心を頑なにし、決して神の言葉を聞き入れず、イスラエルの民たちを解放しようとしませんでした。

そこで、最後の手段として、主なる神様は、ファラオの長子のみならず、エジプトの家畜を含めたすべての初子を打つと、殺すと宣言されます。

ただし、イスラエルの民たちには、その初子を打つ裁きから逃れる方法を示してくださいます。

それが、傷のない1歳の子羊を屠り、その血を家の門柱や鴨居に塗った家々は、初子を打つという神の裁きが過ぎ越され、人の長子も所有している家畜の初子もその難を免れることが出来るというものです。

そうして、イスラエルの民たちは、神様から命じられたように、皆が傷のない羊や山羊を分け合いながら、すべての家の鴨居と門柱にその血を塗り、神の裁きを過ぎ越されるという救いの恵みを体験しました。

この過ぎ越しの恵みを体験したイスラエルの民たちは、この神の救いの業を代々に渡って記念するために、過ぎ越しの祭りを毎年行うよう神から命じられました。

しかしクリスチャンたちは、この過ぎ越しの祭りを行いません。

なぜならば、神の裁きを、永遠に過ぎ越していただく恵みに与るようになったからです。

誰ゆえに？

イエス様ゆえですね

神の裁きを過ぎ越していただくために鴨居と門柱に塗った傷のない1歳の子羊の血の代わりに、

私たち全人類の罪を赦し、神の裁きを過ぎ越していただくために、イエス様が十字架上で血潮を流しながら死んでくださったんです。

だから、もうこれ以上キリストを信じる者たちは、過ぎ越しの祭りをする必要がないんですね。

その代わりに私たちは、クリスマスを祝い、キリストの受難を覚え、イースターを祝い、そして、ペンテコステを祝うわけです。

ヨハネの福音書1：29（パワポ）

今ここにある通りですね。

イエス様は、自らが、世の罪を取り除く神の子羊であるという自覚が御有りでしたので、その公生涯のお働きの始まりも終わりも、過ぎ越しの祭りに合わせていたことが聖書に記されています。

ヨハネの福音書2：13（パワポ）

イエス様の公生涯の始まりは、過ぎ越しの祭りの時でした。
そして、終わりの時も、過ぎ越しの祭りの時でした。

ヨハネの福音書12：1（パワポ）

ヨハネの福音書13：1（パワポ）

マタイの福音書26：1-2（パワポ）

イエス様は、ご自分が過ぎ越しの祭りの時に献げられる傷のない1歳の子羊のように、人類の救いのために血を流し、身を引き裂かれることを誰よりもよく分かっておられ、救い主として覚悟の人生を歩まれました。

この主イエス様の十字架の贖いを連想させ、結びつけるのが過ぎ越しの祭りです。

Part Four

そして、この過ぎ越しの祭りの翌日から数えて50日目に行われたのが、7週の祭りです。

つまり、神の過ぎ越しの恵みに与り、救われ、新しく生まれ変えられた恵みを7週間、49日間覚え、その総決算として50日目の日曜日に新しい穀物を主に

献げるのです。

この50日目の日曜日に献げるというのが、ポイントです。

前日の土曜日、つまり、安息日という週末（1週間の最後の日）ではなく、日曜日という新しい1週間を告げる第一日目に新しい穀物を献げるのです。

一つここで確認しておきたいことがあります。
それは、日曜日は週末ではなく、週始めだということです。

最近の日本のカレンダーは、おかしなことに日曜日が後ろに来ていて、日曜日があたかも週末のように思わされていますが、日曜日は週末ではなく週始めです。

つまり、月火水木金土ではなく、正しくは、日月火水木金土なんです。
だから、土曜日が週末なんです。

これをしっかり把握しておかないと、聖書が言わんとしているメッセージを的確に捉えることが出来ません。

創世記を見ますと、神が6日間かけて天地万物を造られ、7日目に休まれたとあります。

つまり、日曜日から金曜日までの6日間かけてお造りになり、週末である土曜日に安息を取られました。

だから、旧約聖書の時代は、土曜日の安息日を礼拝日として守っていたわけです。

しかし、私たち新約聖書時代に生きるクリスチャンたちは、今日のように日曜日を礼拝日として守っています。

何ですか？

主イエス様が、日曜日、つまり、安息日の翌日に復活されたからです。

では何で、イエス様は安息日の土曜日ではなく、週始めの日曜日に復活されたのでしょうか？

それは、新しい時代の幕開けと、神の国の到来と、新しい天と新しい地という主なる神様の再創造の業を告げ知らせるためです。

今現存するこの世界は、人の罪ゆえに傷物となつてしまい滅びる運命にあるということ、

1週間の最後を意味する土曜日、安息日に復活されるのではなく、始まりを意味する週始めの日曜日に復活されることをもって、主イエス様の復活こそ、神の

天と地の再創造の業の始まりだということを告げ知らせたわけです。

そして、その復活から50日後の、これまた日曜日の週始めのペンテコステの日に、五旬節の日に、7週の祭りの日に、聖霊が下ることをもって教会を誕生させ、キリスト者の群れを起こし、その群れの拡大を宣言することを通して、やがて来る神の再創造の業の結晶である新天新地に入る主人公は、私たちキリスト者であるということを、公に世に示したのです。

これが、ペンテコステの日に、聖霊が降臨しなければならなかった理由です。

ペンテコステの聖霊降臨をもって、約束されてメシアの誕生、メシアの受難、メシアの復活、そして聖霊降臨という一連の完成した救いの業を世に示したわけです。

Part Five

そして、もう一つ7週の祭りに見られる面白い特徴が、新しい「穀物」捧げるということなんです。

「新しく生まれた家畜ではなく、新しい穀物を献げなさい」と言うのです。

正直、この7週の祭りを神様から命じられたイスラエルの民たちにしてみれば、新しい穀物を献げなさいという仰せは困ったことになります。

なぜならば、この仰せを頂いた時の彼らは、神がお与えになるという約束の地に向かって歩んでいる、土地を持たない放浪者だったからです。

穀物を献げるためには、穀物を育てるための土地が必要ですが、彼らにはその土地がありません。

家畜はいます。なぜなら、家畜は放牧することが出来るからです。

しかし、穀物を献げるためには、耕すことの出来る土地を持ち、また、その土地に定住しながらその穀物の面倒を見なければなりません。

それが彼らには出来ないのです。

じゃあ、神様は、彼らイスラエル民族に意地悪をするためにこんな命令をされたのでしょうか？

違いますね。

新しい約束の地に入って所有する土地で思う存分穀物を育て、幸せに生きる希望と将来と未来を抱かせるためですね。

事実、過ぎ越しの祭りを守りなさいと命じた時にも、こんな言葉を付け加えながら仰り、イスラエルの民たちに新しい約束の地に対する希望を抱かせました。

出エジプト記 12 : 25 (パウロ)

7週の祭りは、どこまでも、「新しい」ということにこだわった日なんです。

その新しい時に、聖霊は下り、すべてを刷新し、消えてはなくなり消えてはなくなりという滅びゆく偽の新しいことのために生きるのではなく、決して消えることのない神の国と神の義という永遠に新しいものために生きる道を開き、新天新地を待ち望みながら生きられるようにしてくださいました。

Conclusion

私たちが聖書の中で出会う信仰の英雄たち、預言者たち、弟子たちが生きたその生き様は、もしかすると、現実味のない昔話にしか感じないことがあるかもしれません。

この辛くてしんどい私たちの一人生とは、何の関係もないもののように映るかもしれません。

しかし神様は、今日にあっても、特別に彼らの生き様をお見せになるのには理由があります。

それは、私たちの人生をお造りになった神様を知り、私たちの人生が何ものなのかを学ばせるためです。

今も周りを見てみますと、ヨセフのように、暗い闇を歩いているかのような人生があり、

モーセのように、やることもなく未来も描けない人生もあり、

ヨブのように、艱難と逆境の中で挫折している人生もあり、

ハバククのように、不条理な世の中に憤慨している人生もあり、

パウロのように、私が知っている神様はこうでなければならないという考えに捕らわれている人生もあります。

また、2, 3歩引いて自分の人生を見た時、ヨセフのような、モーセのような、ヨブのような、ハバククのような、パウロのような処を生きている私たち自身があります。

そんな人生を生きる私たちに、聖霊を下さり、信仰をお与えくださり、いつでも、どんな場所でも、どんな境遇でも、新しくされる恵みと機会を与えてくださいました。

今、私たちに出来ることは、過ぎ行つた過去にこだわるのではなく、今、新しくされる聖霊を与えられているという祝福を覚え、祈り求めることです。

どんな時も、降臨された聖霊様ゆえに、「今が新」「今が新た」です。

そして、決してなくなることのない「新しいこと」が私たちには約束されています。

お祈りいたしましょう。

祝祷：ローマ人への手紙 8：1－2